

21年センター試験平均点は、

文・理系型とも2年ぶりに大幅ダウン！

5(6)教科7科目平均点(900満点/加重平均)；

文系型 **527.9** 点(-20.3点) / 理系型 **531.2** 点(-17.2点)

基幹科目の英語、国語、数学Ⅰ・Aダウン、数学Ⅱ・Bは前年並み

旺文社 教育情報センター 21年2月

21年センター試験は志願者54万3,981人(前年比0.1%増)、受験者50万7,621人(同0.6%増)で、ともに2年ぶりの増加の中で実施された。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、国公立大センター試験の文系及び理系の標準型<5(6)教科7科目；900点満点>の加重平均点を旺文社で算出した結果、文系型527.9点、理系型531.2点で、ともに大幅ダウン。18年の新課程(現行課程)センター試験平均点の大幅アップ以降、1年おきに大幅なアップ・ダウンを繰り返している。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■文系型・理系型の「5(6)教科7科目」平均点

◎ 国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に5(6)教科7科目(900点満点)が主体となっている。標準的な受験科目の編成としては、次の2タイプである。

文系標準型(900点満点)＝国語＋地歴＋公民＋数学2科目＋理科1科目＋外国語

理系標準型(900点満点)＝国語＋地歴・公民から1科目＋数学2科目＋理科2科目＋外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す全体の平均点(加重平均)も、文系型と理系型とに分けて算出。英語は「筆記＋リスニングテスト」の得点率を基に200点満点に換算。

● 文系標準型平均点＝527.9点(前年より20.3点ダウン)

● 理系標準型平均点＝531.2点(同、17.2点ダウン)

◎ ここでの文系型、理系型の平均点は、私立大志望者(セ試利用入試は3科目主体)や、推薦・AO入試で年内に大学進学を決めてしまう早期受験組(学習意欲や学力の維持・向上策の一環としてセ試受験を活用)など、すべてのセ試受験者の加重平均を集計したものである。

実際の国公立大文系及び理系志望者の平均点(ともに900点満点)は、上記の数値より文系、理系とも数十点程度高いとみられる。

◎ 平均点がダウンした主な科目は、英語(対前年差。以下、同。-12.6点；筆記-10.3点、リスニングテスト<以下、リスニング>-5.5点)、日本史B(-6.4点)、国語(-6.1点)、数学Ⅰ・A(-2.3点)、地理B(-1.9点)など。

一方、平均点がアップした主な科目は、政治・経済(+5.6点)、化学Ⅰ(+5.3点)、倫理(+3.9点)、世界史B(+3.7点)などである。

●平成21年度大学入試センター試験(本試:確定)平均点等一覧

<平成21年2月5日 大学入試センター発表>

教科名	科目名	平成21年(確定)		平成20年(確定)		平均点の 対前年差	受験生数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)		—	527.9	—	548.2	▲ 20.3	—	
理系標準型平均点(900点満点)		—	531.2	—	548.4	▲ 17.2	—	
国語(200点)	国語	484,871	115.5	481,315	121.6	▲ 6.1	3,556	
地理歴史 (100点)	世界史A	2,187	44.2	2,164	49.3	▲ 5.1	23	
	世界史B	94,106	62.7	93,928	59.0	3.7	178	
	日本史A	4,365	46.5	4,260	56.0	▲ 9.5	105	
	日本史B	144,327	57.9	143,676	64.3	▲ 6.4	651	
	地理A	5,501	54.7	5,811	56.8	▲ 2.1	▲ 310	
	地理B	109,616	64.5	107,519	66.4	▲ 1.9	2,097	
公民 (100点)	現代社会	169,711	60.2	174,686	60.6	▲ 0.4	▲ 4,975	
	倫理	53,116	71.5	51,134	67.6	3.9	1,982	
	政治・経済	82,804	69.3	80,598	63.7	5.6	2,206	
数 学	数学① (100点)	数学Ⅰ	9,209	49.3	11,765	47.5	1.8	▲ 2,556
		数学Ⅰ・A	354,609	64.0	350,198	66.3	▲ 2.3	4,411
	数学② (100点)	数学Ⅱ	7,503	28.4	8,919	30.3	▲ 1.9	▲ 1,416
		数学Ⅱ・B	319,045	50.9	317,103	51.0	▲ 0.1	1,942
		工業数理基礎	67	33.5	67	43.3	▲ 9.8	0
		簿記・会計	1,348	50.1	1,253	50.1	0.0	95
	情報関係基礎	660	61.0	622	68.3	▲ 7.3	38	
理 科	理科① (100点)	理科総合B	17,175	58.4	17,614	61.3	▲ 2.9	▲ 439
		生物Ⅰ	176,043	55.9	176,766	57.6	▲ 1.7	▲ 723
	理科② (100点)	理科総合A	30,427	56.6	33,472	48.0	8.6	▲ 3,045
		化学Ⅰ	200,411	69.5	199,951	64.2	5.3	460
	理科③ (100点)	物理Ⅰ	143,646	63.6	142,233	64.6	▲ 1.0	1,413
地学Ⅰ		25,921	51.9	26,841	59.7	▲ 7.8	▲ 920	
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	500,297	115.0	497,101	125.3	▲ 10.3	3,196
		リスニング(50点)	494,342	24.0	490,853	29.5	▲ 5.5	3,489
		筆記+リス(200点)	—	111.2	—	123.8	▲ 12.6	—
		ドイツ語	106	153.5	116	135.2	18.3	▲ 10
		フランス語	149	139.0	152	135.3	3.7	▲ 3
		中国語	409	137.6	460	146.4	▲ 8.8	▲ 51
		韓国語	136	167.8	142	143.5	24.3	▲ 6

<注>① 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学①と数学②の2科目受験(200点)、理科①、②、③合わせて集計100点)、外国語(200点;英語は筆記<200点>+リスニング<50点>の得点率を基に200点満点に換算)の加重平均点。

② 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。

③ 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。

④ 5教科6科目(文系・理系共通の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は523.9点で、20年より22.5点のダウン。

⑤ 得点調整は、対象科目間の平均点差の最大が「化学Ⅰ-地学Ⅰ」=17.6点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。

⑥ 表中の▲印は、対前年差のダウンまたは減少を示す。

■5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

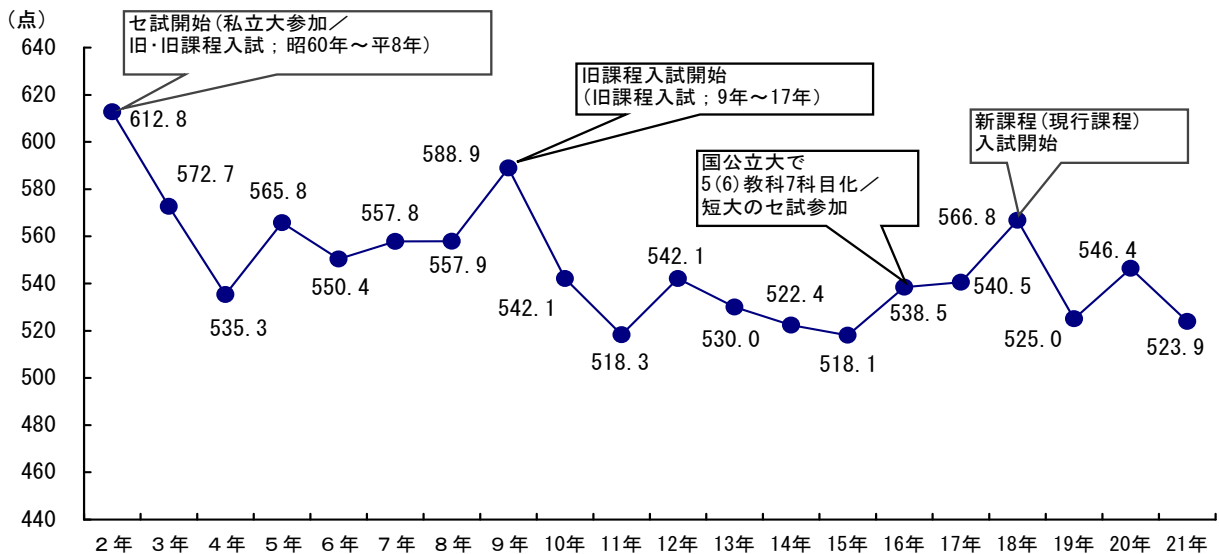
◎ 過去の文・理系型共通の5教科6科目(国語、地歴・公民から1科目、数学2科目、理科1科目、外国語)の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、21年の「5教科6科目」平均点(900点満点に換算。以下、同)を算出した。結果は**523.9点**となり、前年より**22.5点**ダウンした(下図参照)。

◎ 2年はセ試開始の年で、平均点612.8点はこれまでの最高である。9年は旧課程入試の始まった年で、平均点は8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点(得点率57.6%)まで低下した。15年は、英語の大幅アップに対し、国語Ⅰ・Ⅱと数学Ⅱ・Bが大幅にダウン。結局、基幹3科目のアップ・ダウンが相殺する形となったが、平均点は518.1点で史上最低を記録。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目が本格化し、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・Aなど、基幹3科目のアップが全体の平均点を大きく押し上げた。旧課程入試最後の17年は、英語がダウンしたものの、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅱ・Bのアップに加え、数学Ⅰ・Aが小幅なダウンに留まったことなどから、前年より2.0点アップした。新課程(現行課程)入試初年度の18年は、英語、国語、数学Ⅱ・Bなどのアップで前年より26.3点アップの566.8点の高得点となった。19年は国語、数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・Bをはじめ、一部の文系科目を除き軒並みダウンし、前年より41.8点の大幅なダウン。20年は英語の平均点が筆記、リスニングともダウンしたものの、数学Ⅰ・A、国語、現代社会、地理B、化学Ⅰ、数学Ⅱ・Bなどのアップで、前年より21.4点の大幅アップ。

◎ 21年は英語(筆記、リスニングとも)、国語、数学Ⅰ・Aなどの基幹科目の平均点ダウンで、再び前年より22.5点の大幅ダウンとなった。

◎ 制度改革、及び教育課程改編に伴う出題科目や内容等の変更時のセ試は、平均点アップの傾向がみられる。最近は、18年新課程セ試のアップ以降、1年おきにアップ・ダウンを繰り返している。

●センター試験(本試)5教科6科目加重平均点(文・理系型共通;900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。18年は「経過措置」科目のデータを除外してある。

■英語;筆記-10.3点、リスニング-5.5点で、「筆記+リスニング」は12.6点ダウン

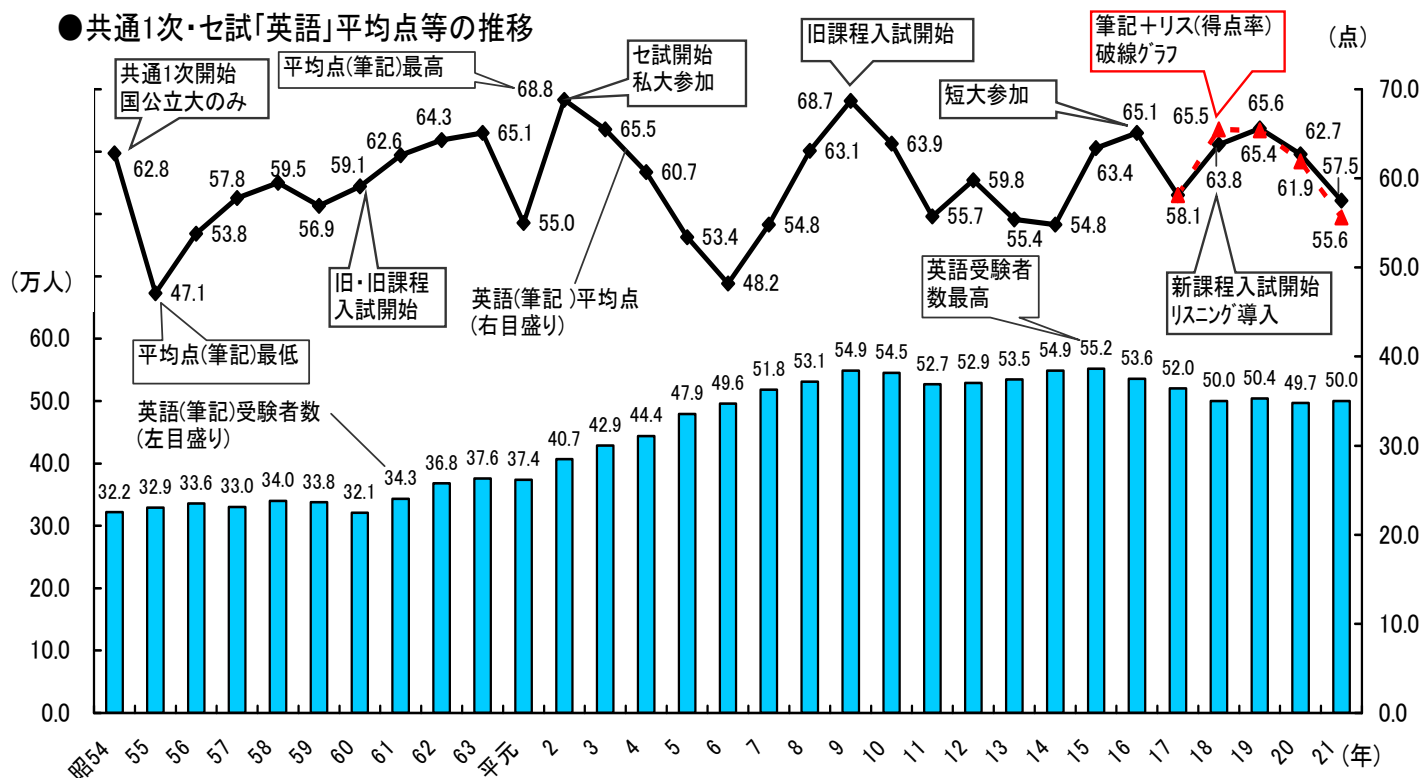
◎ リスニングは、学部ベースで見ると、国立大100%、公立大98%、私立大70%近くで合否判定に利用されるが(筆記とリスニングの得点次第ではリスニング不採用の場合も含む)、受験率は頭打ちである。21年のリスニングの受験率(リスニング受験者数÷全受験者数×100)は97.4%で前年と同じ。なお、筆記の受験率98.6%も前年と変わらない。

◎ 前年5.8点(200点満点)ダウンした21年の筆記は、出題形式に大きな変化はなかったものの、総語数が増えたことなどから、さらに平均点を下げ、20年より10.3点ダウンの115.0点(得点率57.5%)となった。

一方、リスニングは、18年の導入時は平均点36.3点(50点満点、得点率72.6%)と高得点であったが、19年32.5点(同65.0%)→20年29.5点(同59.0%)→21年24.0点(同48.0%)と、3年連続のダウン。また、「筆記+リスニング」の得点率(旺文社算出)も、18年65.5%→19年65.4%→20年61.9%→21年55.6%とダウンし、21年の得点(得点率から200点満点換算)は111.2点で、前年より12.6点低下した。

◎ 1月17日(本試験)のリスニングでは、ICプレーヤーの不具合などから249人が同日、リスニング終了後に別の機器で「再開テスト」を受けた。また、これとは別にテスト実施上のトラブルなどから32人が「再試験」を、病気などで本試験を受けられなかった167人が「追試験」を、それぞれ1月24日に受けた。

◎ ところで、英語(筆記)は例年、ほぼ全てのセ試受験者が受験する(21年受験率98.6%)ため、その平均点のアップ、ダウンは文・理系型共通の5教科6科目の加重平均点のアップ、ダウンと重なる部分が少なくない(下図とP.3のグラフを比較参照)。



注. ① 各年とも、「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点を実線で、受験者数を棒グラフで表示。
 ② 18年～21年は「筆記+リスニング」の得点率(18年65.5%、19年65.4%、20年61.9%、21年55.6%)を破線で表示。

■国語;平均点ダウンで、得点率が再び“5割台”に低下

◎ 英語に次いで受験者の多い国語(21年受験率95.6%)について、前回の旧課程入試の始まった9年から21年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

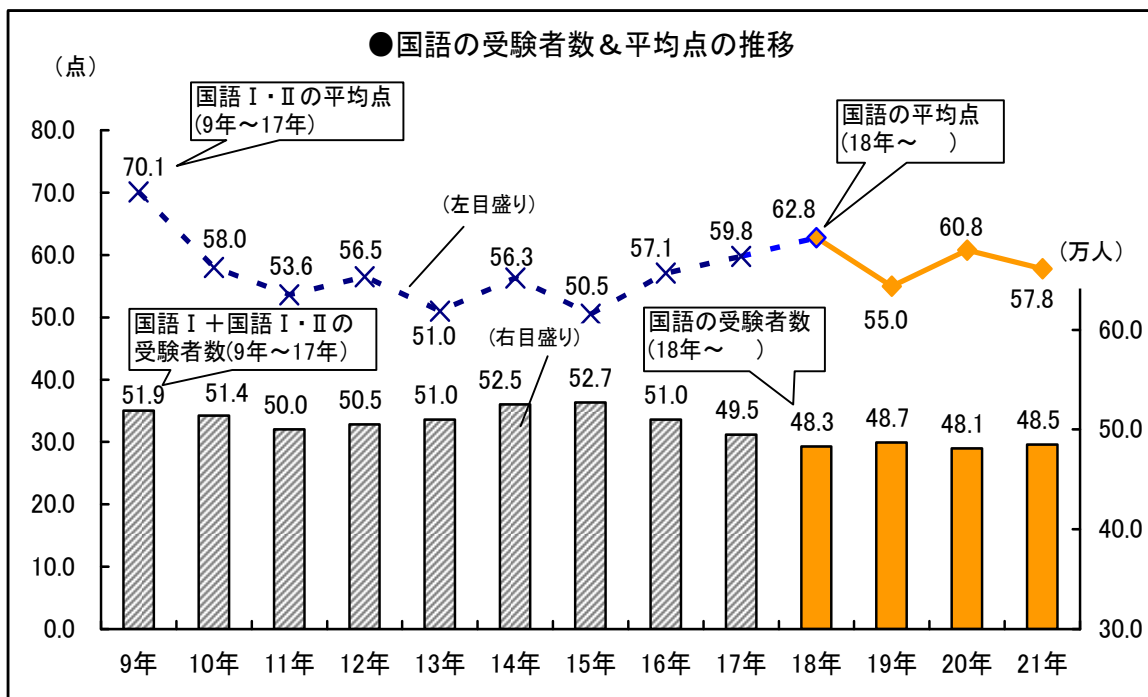
◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落した。

20年は平均点が大幅にアップし、得点率も2年ぶりに6割台に戻った。

◎ 21年は、評論の文章量の大幅増、選択肢の紛らわしさ、古文の長文出題などで難化し、平均点ダウンにつながった。得点率も再び5割台に低下し、文系型、理系型それぞれの加重平均点を引き下げる要因の一つとなった。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

注2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは2.3点ダウンの64.0点。 数学Ⅱ・Bはほぼ前年並みの50.9点。
数学Ⅱ・Bは過去20回で平均点5割以下が5回、平均点の変動幅も大。

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人超の受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、21年までの20回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰを含む。以下、同)の最低点は11年の50.7点(旧・数学Ⅰの最低点も3年の50.7点)、最高点は12年の73.7点で、その較差は23.0点。

◎ 一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点。

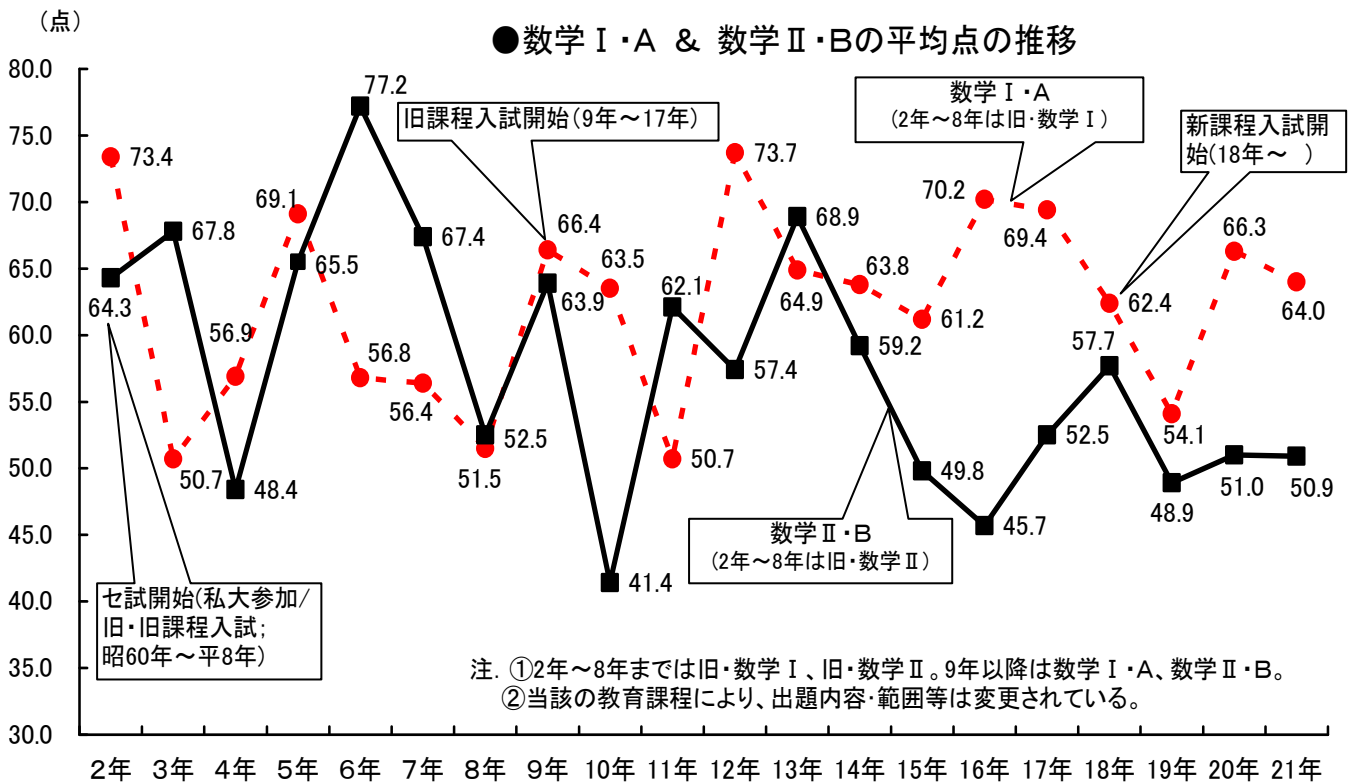
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は21年も含め、過去20回の試験(本試)で50点以下が5回もあって変動幅も大きいのにに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点以下は1回もない。

◎ 数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示していると思われる。

◎ 19年は数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・Bとも大幅な平均点ダウンで、“数学ショック”を招いた。

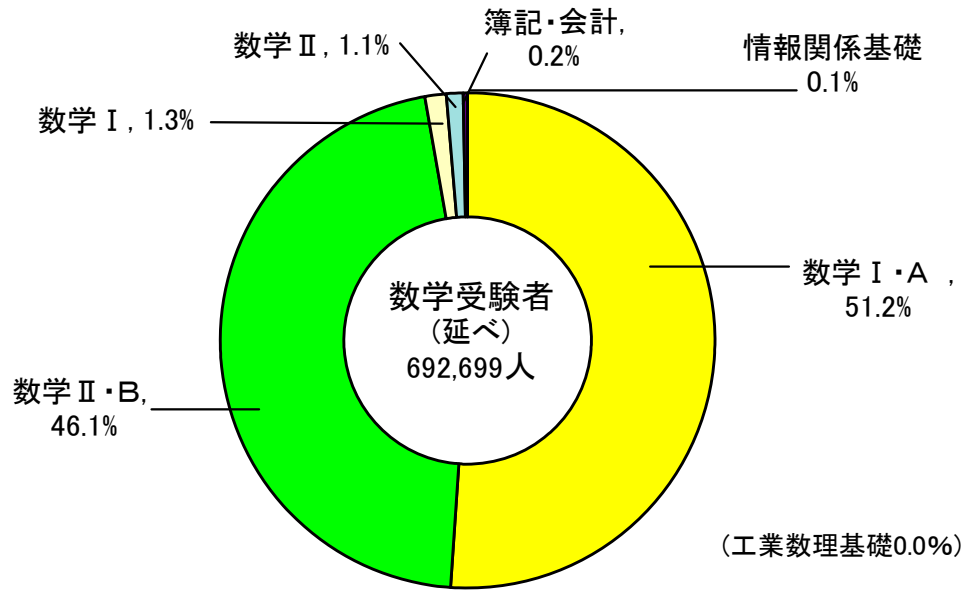
◎ 20年の数学Ⅰ・Aは問題量の減少などで易化し、平均点が大幅にアップ。また、数学Ⅱ・Bは難易度・出題量とも前年と大きな変化はなかったが、平均点はややアップした。

◎ 21年の数学Ⅰ・Aは、出題の難易度や量は前年並みだったが、題意の取り違いなどのケアレス・ミス等で2.3点の平均点ダウンとなった。数学Ⅱ・Bは計算量の増加があったものの、平均点は0.1点ダウンのほぼ前年並みであった。

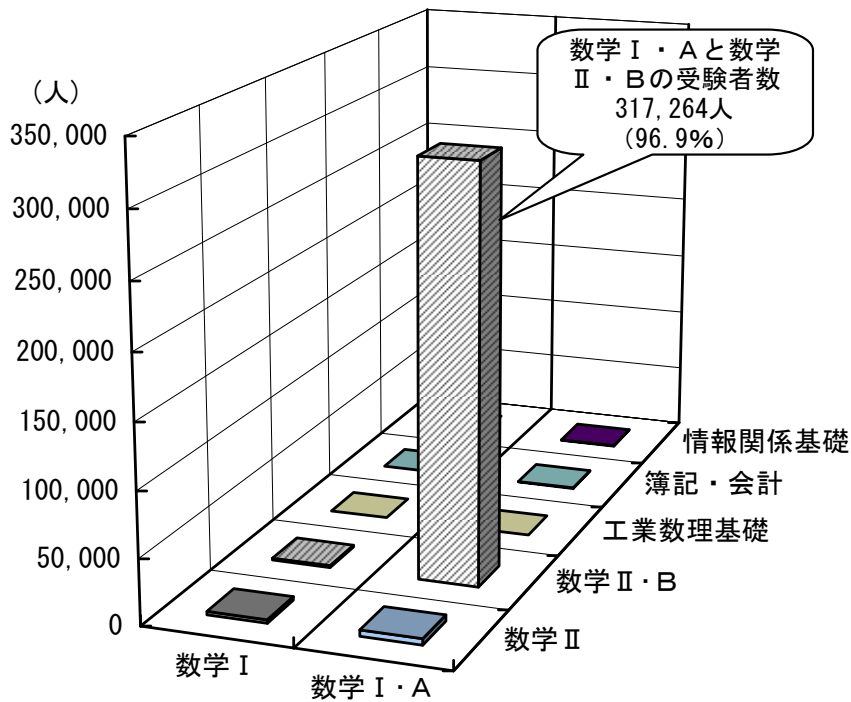


□数学2科目受験は、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bで約31万7,300人(96.9%)

●数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



●数学2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



(人)

	数学Ⅱ	数学Ⅱ・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学Ⅰ	2,663	1,537	21	205	98
数学Ⅰ・A	4,732	317,264	40	401	419

■公民; 現社の受験者は3年連続の減少、平均点は前年並みの 60.2 点

◎ 国公立大の5教科6科目(地歴と公民から1科目)が主流であった時代は所謂“公民保険”として、「地歴・公民ダブル受験」の傾向が見られた。

しかし、16年から本格化した国公立大文系の6教科7科目により、公民は文系標準型の“必須科目”となった。そのため、16年の公民受験者は、史上最多の約33万人を記録した。

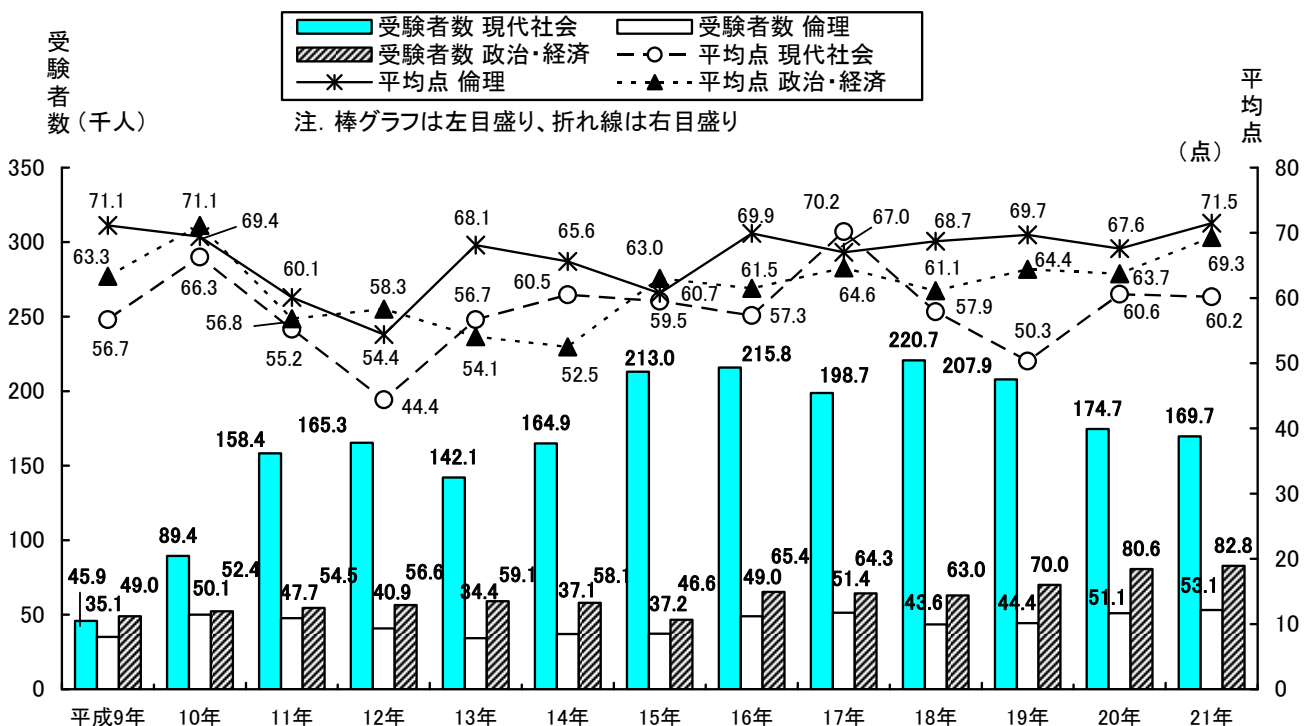
◎ 新課程(現行課程)となった18年から、公民の時間割はそれまでの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日が文系科目でまとまった。18年はこうした時間割の変更に加え、前年の現代社会の高得点などから、軒並み受験者減となった教科の中で唯一、公民受験者は約1万3,000人(4.1%)増えた。19年は前年の現代社会の大幅な平均点ダウンによって、現代社会の受験者が約1万2,800人(5.8%)減り、公民としても約4,900人(1.5%)減。

◎ 20年は、現代社会の2年連続の大幅な平均点ダウン(17年70.2点→18年57.9点→19年50.3点)から、主に国公立大理系志望者にとって“公民保険”の意味合いが薄れ、現代社会の受験者が約3万3,000人(16.0%)減り、公民全体でも約1万6,000人(5.0%)の減少となった。

◎ 21年は現代社会の前年平均点(60.6点)が倫理(前年平均点67.6点)や政治・経済(同63.7点)に比べて低かったことなどから、主に理系志望者に敬遠され受験者減になった。

◎ 下のグラフを見ると、公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンや平均点の高・低などに影響されている様子がうかがえる。

●公民[現社・倫理・政経]の受験者数&平均点の推移(本試験)



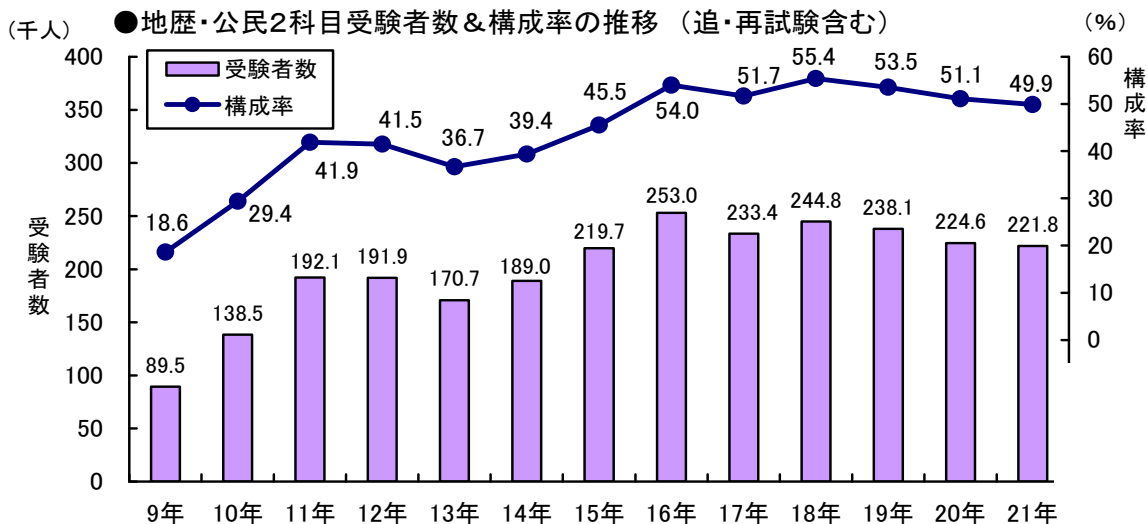
- 11年までは現社の受験者数が毎年倍増。しかし、平均点は下降傾向で、12年は現社と倫理で史上最低となった。
- 15年は、倫理と政経が前年の平均点ダウンから敬遠され、受験者数は、倫理が前年並み、政経が19.9%減となったものの、現社は前年より約4万8,000人(29.2%)増えた。
- 16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。
- 新課程(現行課程)となった18年はセシ時間割の変更と、前年平均点アップ、高得点の現社の受験者増で、各教科受験者減の中、唯一、公民受験者は増えた。
- 19~21年は、現社のそれぞれ前年平均点ダウンや低得点から受験者が減り、公民全体の受験者減にもつながった。

■地歴・公民;2科目受験者、3年連続減少。構成率も3年連続ダウンの49.9%

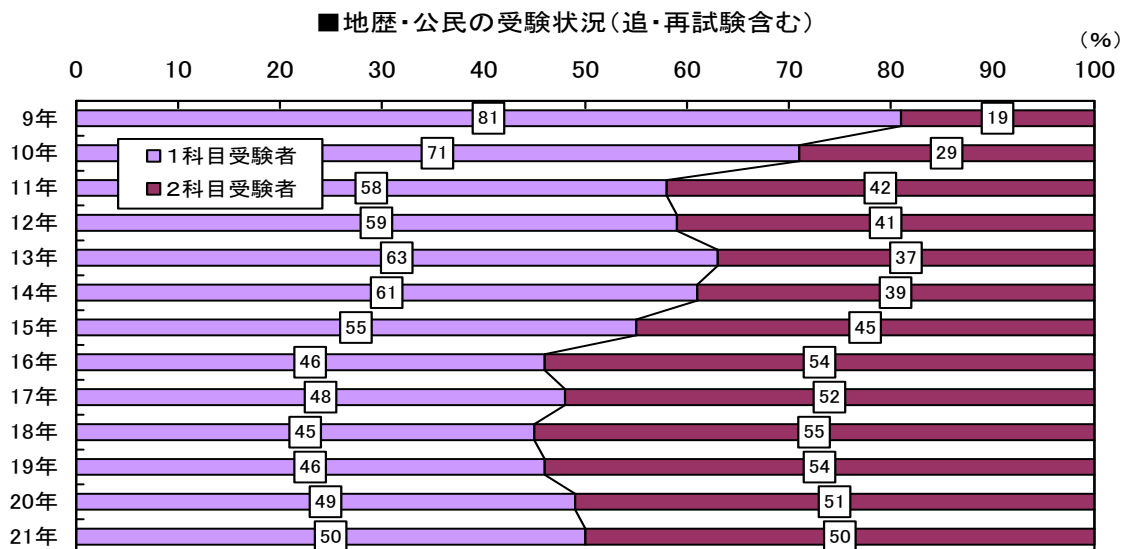
◎ 地歴・公民2科目受験は前述のように、「5教科6科目」(地歴・公民から1科目)時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数が激増した。16年は5(6)教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%超となった。17年は、2科目必須の大学・学部は前年より増えたが、セ試全体の受験者減に加え、前年の公民平均点ダウン(倫理を除く)による“公民保険”組の減少などで、2科目受験者数、構成率とも前年を下回った。

◎ 18年は、時間割の変更で地歴と公民が第1日目の午前中にまとまったことなどで、2科目受験者数は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人となり、地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%に達した。

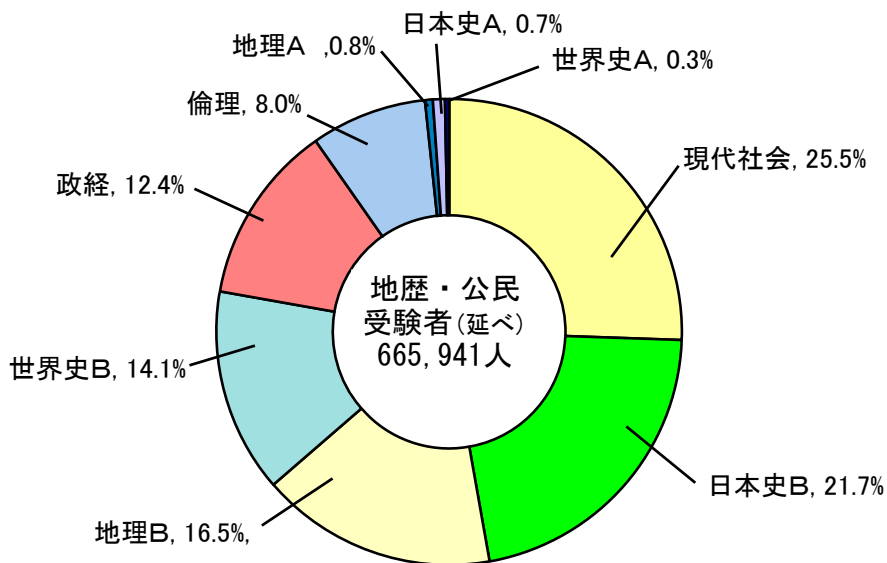
◎ 19~21年は、それぞれ前年の現代社会(公民受験者の過半数を占める)の平均点ダウンや、他の公民科目などに比べて低得点であることから、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験組が減少したとみられる。



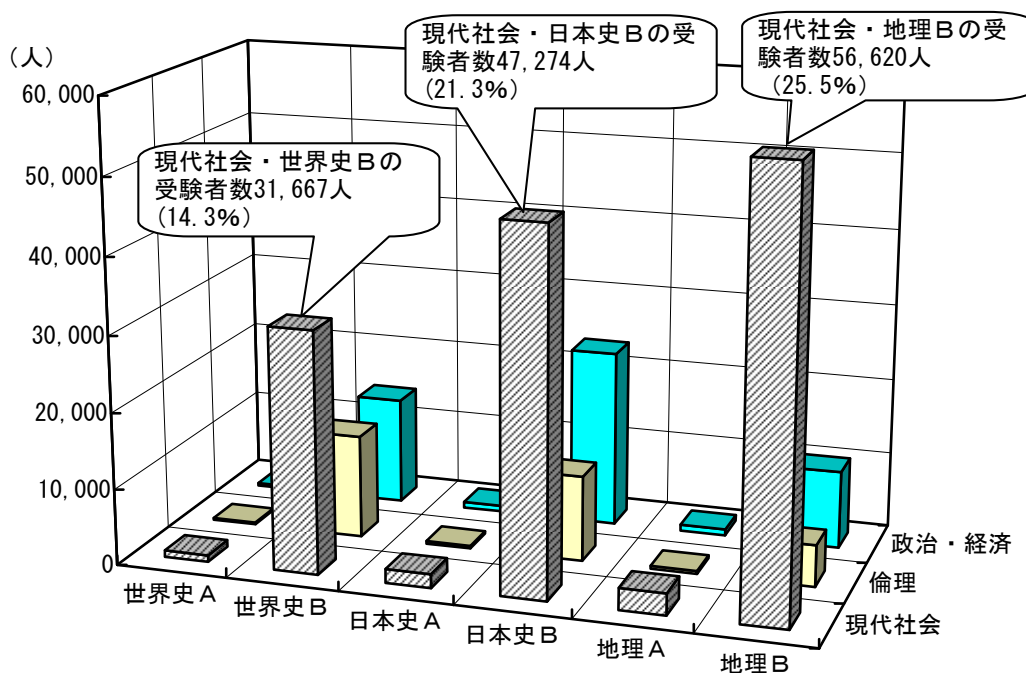
注。「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



●地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



●地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(人)

	現代社会	倫理	政治・経済
世界史A	887	262	344
世界史B	31,667	13,531	14,111
日本史A	1,811	331	767
日本史B	47,274	11,229	23,239
地理A	2,865	390	817
地理B	56,620	5,435	10,170

■理科;科目別受験者軒並み減少の中、理系必須の物理Ⅰと化学Ⅰの受験者は増加

◎ 前回の旧課程入試開始の9年以降、理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどから理系を中心に理科2科目化が進み、2科目受験者は17年まで11年を除き毎年増加していた。

特に、16年は5(6)教科7科目化により国立大理系を中心に2科目必須になったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(3科目受験者含む。以下、同)は一気に増えて24万人超となり、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。

17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)のさらなる増加に加え、綜合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

◎ 18年はセ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の実受験者数は前年より約1万5,000人(4.1%)少ない約35万5,200人であった。国公立大における理科2科目必須の増加や医学部(医学科)での3科目必須(5大学5学部)もみられたが、理科2(3)科目受験者数は前年より約2万5,900人(10.4%)減の約22万2,800人で、構成率も前年より4.5ポイントダウンの62.7%だった。

19年は、理科全体の実受験者数は前年より若干減り、約35万4,800人だが、各科目の受験者数は増えている。これは、2科目受験者(実受験者)が約2,400人(1.2%)増えたため、全体の延べ受験者数は約1,500人(0.3%)増の約60万7,100人だった。

20年の理科全体の実受験者数は前年より約5,300人、1.5%減少の約34万9,600人だった。科目別で見ると、物理Ⅰを除いて全て減少しており、理科総合A(物理・化学分野)の約5,300人、13.7%減や、理科総合B(生物・地学分野)の約1,700人、8.9%減などが目立つ。

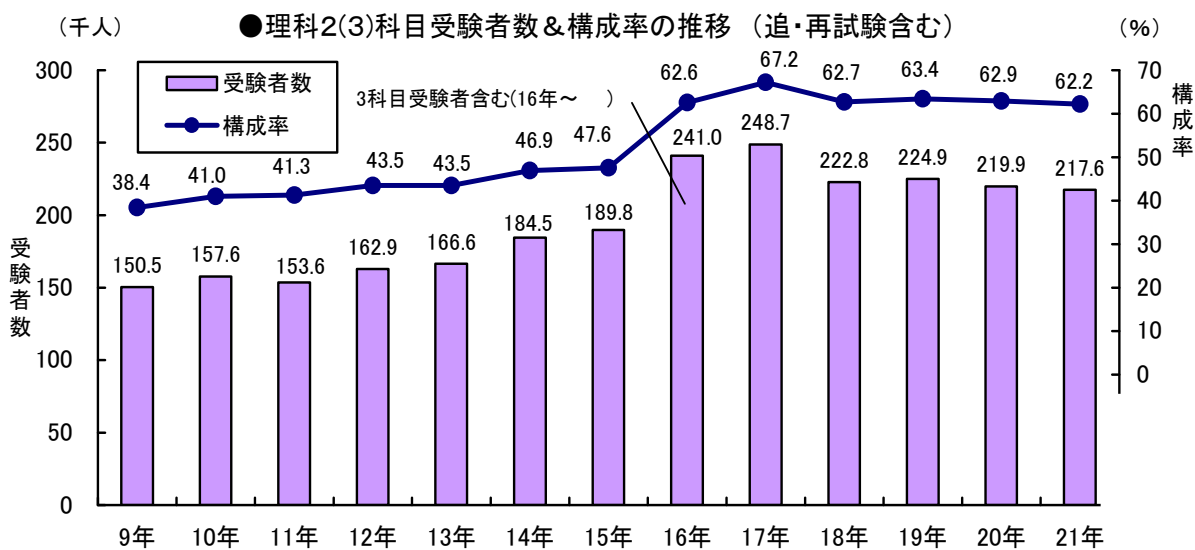
物理Ⅰの受験者数は、前年の平均点大幅ダウンにもかかわらず、前年より約1,000人、0.7%多い約14万2,000人だった。化学Ⅰの受験者数はほぼ前年並みであったが、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」の2科目受験者は前年より約1,700人、1.6%増えて約10万4,600人だった。

◎ 21年は、理科全体の実受験者数が前年より約600人、0.2%の微増で約35万200人であったが、延べ受験者数は物理Ⅰと化学Ⅰを除き、各科目とも軒並み減少し、全体の延べ受験者数は前年より約3,200人、0.5%減の約59万3,900人。因みに1科目受験者(実受験者数。以下、同)は約3,000人(2.3%)増えたが、2科目受験者は約1,000人(0.5%)、3科目受験者は約1,400人(5.1%)それぞれ減っている。

また、「物理Ⅰ+化学Ⅰ」の2科目受験者(実受験者数)は前年より約2,800人(2.6%)増の約10万7,400人で、2科目受験者における構成率も1.7ポイント上昇の56.1%に達している。

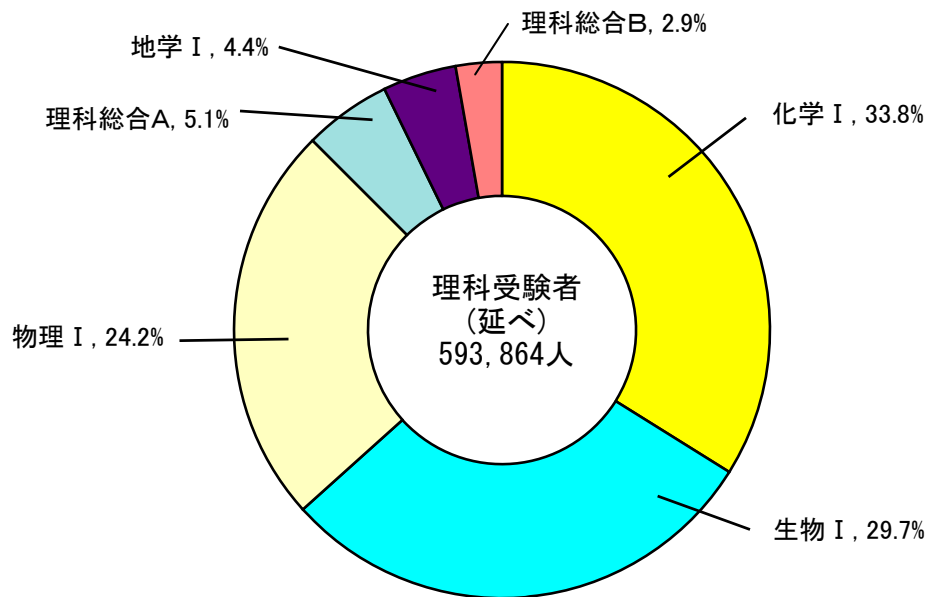
物理Ⅰ・化学Ⅰの受験者増の背景には、理系志望者の増加に加え、理系に進学した後の専門基礎学力の担保として物理Ⅰ、化学Ⅰを求める大学側の動きと、それに対する高校側の理系志望者への進学指導などがあろう。

平均点については、理科総合Aが8.6点アップ、化学Ⅰが5.3点アップのほか、軒並みダウンした。特に、文系志望者の受験率が高い生物Ⅰは、18年の平均点大幅アップ(+18.0点で、平均点69.6点)以降、3年連続ダウンとなっている。

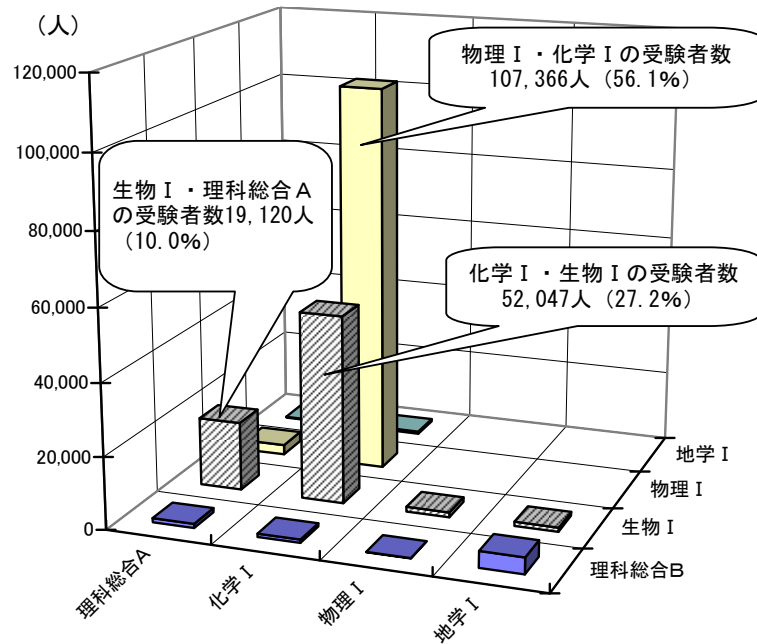


- 注1. 16年以降は理科3科目受験も含む(16年から3科目受験が可能)。
 2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1・2・3科目受験)に占める、2科目受験者数(3科目受験も含む)の割合。

●理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



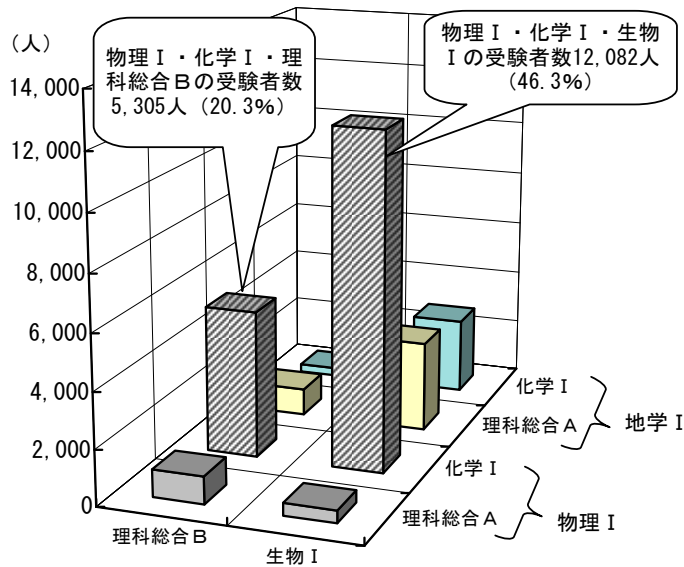
●理科2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

	理科総合A	化学I	物理I	地学I
理科総合B	1,147	911	114	4,495
生物I	19,120	52,047	1,296	1,114
物理I	2,824	107,366	—	—
地学I	363	643	—	—

●理科3科目受験者の内訳（追・再試験含む）



(人)

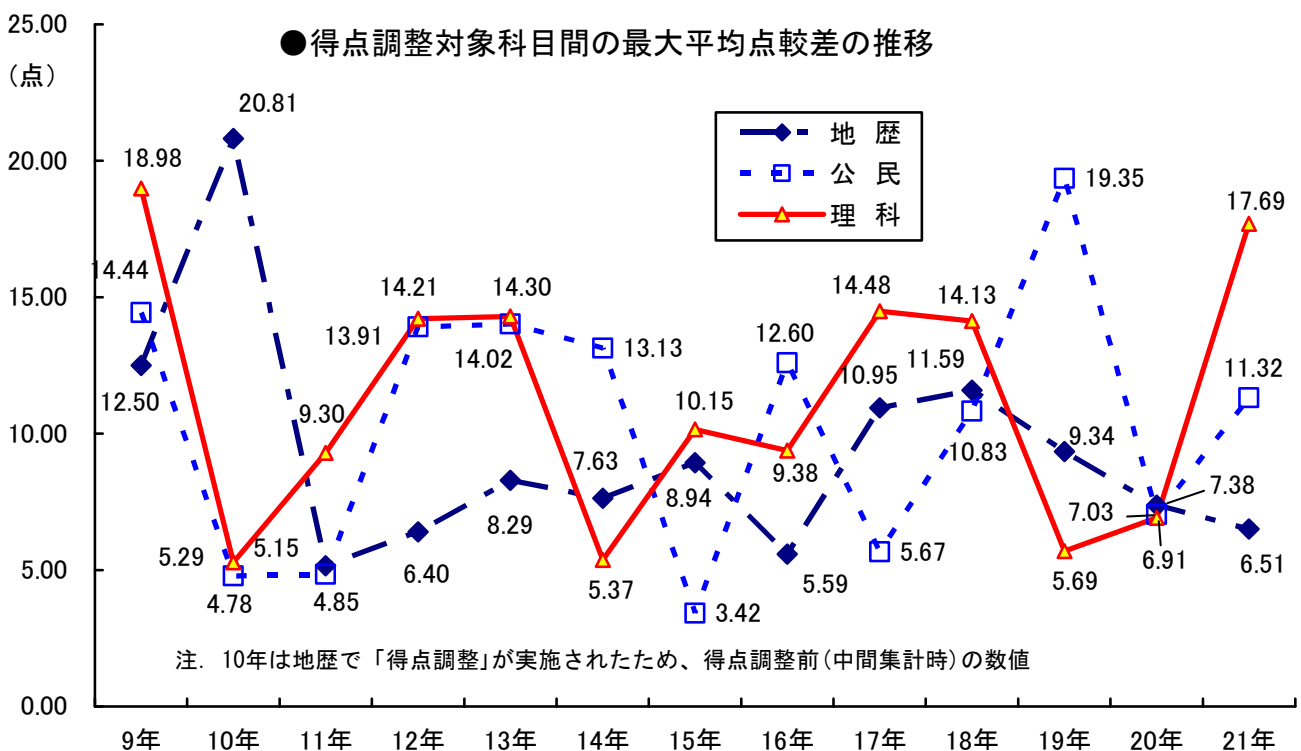
理科③		物理I		地学I	
理科②		理科総合A	化学I	理科総合A	化学I
理科①	理科総合B	987	5,305	979	301
	生物I	446	12,082	3,268	2,753

■**得点調整**;対象科目間の平均点較差「化学Ⅰ－地学Ⅰ＝17.69点」で、調整なし

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各くⅠ科目」間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

21年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴；地理B－日本史B＝6.51点、公民；倫理－現代社会＝11.32点、理科；化学Ⅰ－地学Ⅰ＝17.69点で、最大較差の理科でもガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

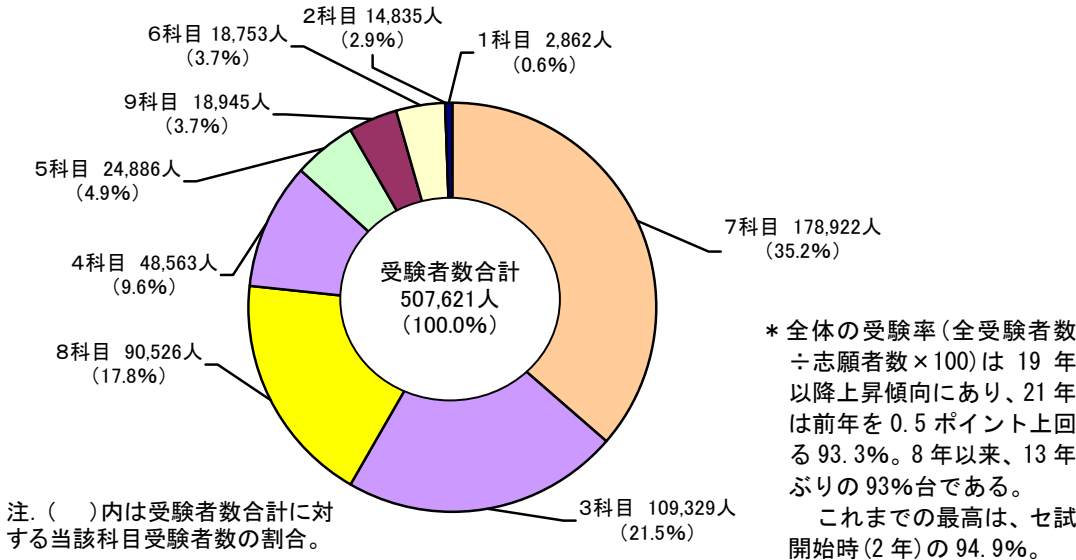
■**受験科目数別の受験状況**；「**国公立大型－7科目**」「**私立大型－3科目**」受験が増加

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の5(6)教科7科目化によって「7～9科目」受験が急増し、高い受験率を示している。

◎ 21年は全体の受験者数微増の中、8・9科目の多数科目や1・2科目の少数科目の受験者が減る一方で、7科目と3科目の受験者増が目立ち、セ試受験も「国公立大型－7科目」「私立大型－3科目」といった二極化が進んでいる。平均受験科目数は、5.79科目である。

21年の「7～9科目」受験率(当該科目受験者数÷全受験者数×100)は56.7%で前年を0.3ポイント下回ったが、受験者数は前年より約1,100人(0.4%)増加。これは、7科目受験者の約7,000人(4.1%)増によるもので、7科目受験者は約17万9,000人(受験率35.2%)に及ぶ。他方、私立大型の3科目受験者も約2,200人(2.1%)増え、約10万9,000人(受験率21.5%)。

●**21年センター試験／受験科目数別受験者数**



●**センター試験／受験科目数別受験率の推移**

